

琉球の方言 2巻 : 奄美大島宇検村湯湾方言

法政大学沖縄文化研究所

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

1976-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012853>

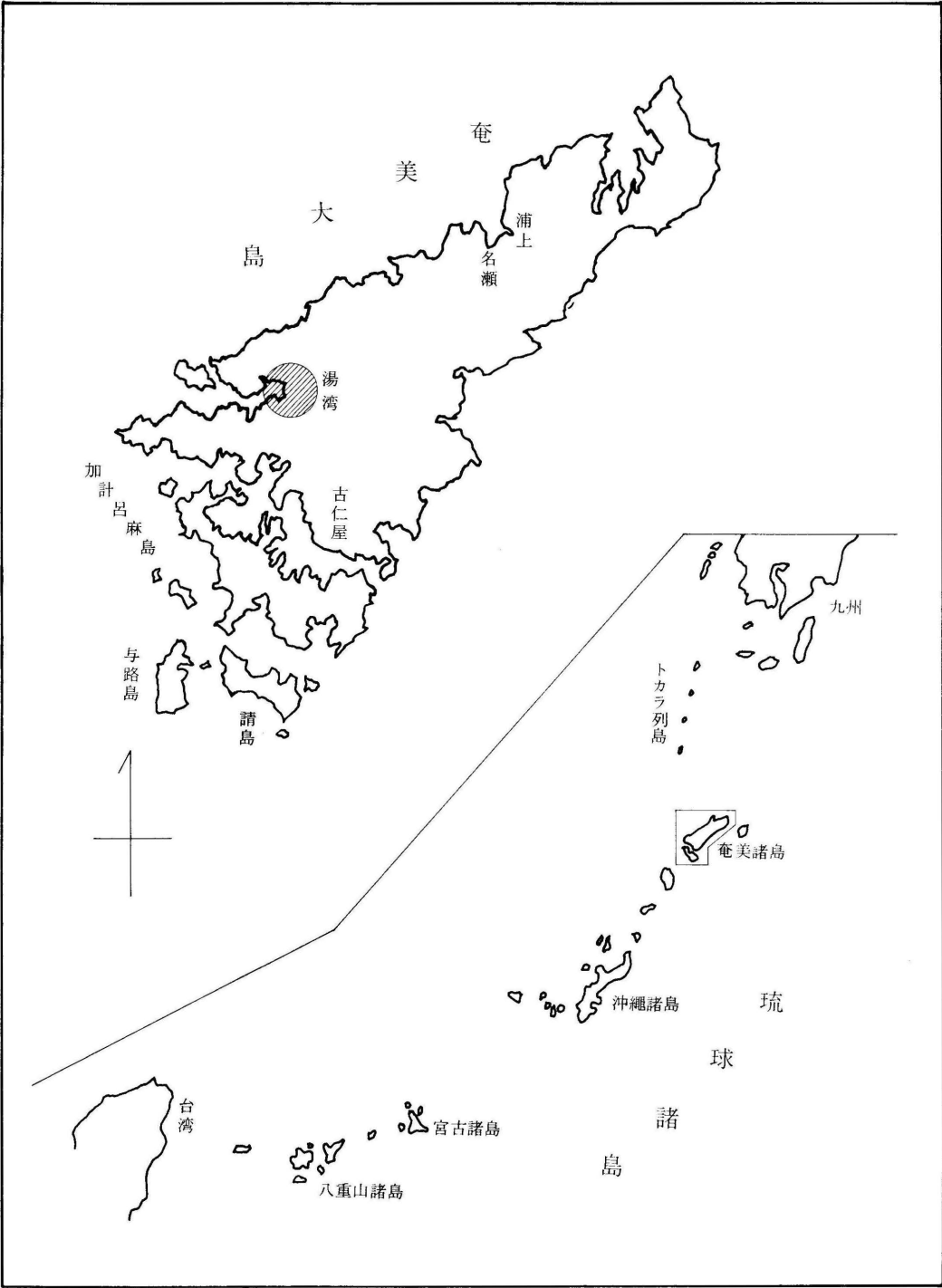
琉 球 の 方 言

奄美大島宇検村湯湾方言

1 9 7 6

法政大学沖縄文化研究所

奄美大島宇検村湯湾の地点図



はじめに

琉球方言は日本語の中にあつて本土方言とは異なる諸特徴をもっている言語である。その特異性を生み出した要因として島嶼という地理的条件をあげることができる。すなわち南海の島嶼には本土の時代ごとの言語変動の影響がそのまま伝播して行かなかったために、本土における歴史的な言語変化の波からはずれてしまった面をもっている。たとえば、本土では、はやくに失われたハ行 p 音や、室町末期に起こった活用語の連体形と終止形の同化作用という大変動や、係り結び法の消失など、これらは、中央語における歴史的な言語変化の現象としてあげることができるが、この現象は、本土のあらゆる方言をまき込んでいった。ところが、琉球方言では本土のように中央語の歴史的な言語変化の波をかぶらずに、これらの古形をいまだとどめ、あわせて多くの古語もよく保存していて、その特異性をあらわしているのである。

古い相もさることながら、いま一つは、島嶼という条件によって、琉球方言の内部において新しい個別の言語変化が深化していったためにその特異性をさらに深めていっていることである。有気音と無気音の対立、宮古方言の f の発生などがそれである。

このように、古い相と新しい相をもつ琉球方言は、奄美・沖縄・宮古・八重山・与那国の諸方言の特徴を生み出し、これらはさらに小方言に分化し、島ごと、集落ごとの方言にまで細分されているのである。これは、あたかも日本語の変化の可能な限りの方向性を示しているかのようでもある。このような小方言を生んだ琉球方言の諸変化は、本土方言では観察できない多くの言語現象の観察を可能にしてくれる。これらの現象を比較検討することによって、琉球方

言の変化過程をあとづけることが可能であり、ひいては日本語の変化過程の全体像をえがくことも可能性のあることである。そのための現存する諸方言の資料を整えることが急がれる。

日本語の一分枝として存在している琉球方言は、いま、試練の時機に直面している。すなわち、交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり、また、マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは、工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいえ、大いなる文化遺産の消失を意味するものであり、文化史的に貴重な資料が失われることになる。

このような状況にあつて、法政大学沖縄文化研究所では、琉球方言の実態をできるだけ広範囲にわたって収集し、少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである。

琉球方言の資料を収集するにあつて、次のような計画をたてた。

- (1) 奄美諸島から与那国島にいたる琉球全域の言語実態を、地理的にも、言語的にも、できるだけ広範囲にわたって記述する。
- (2) 調査は、年に一地点に限定し、その地点の言語現象をできるだけ多く記述し、年々その成果を積み重ねていき、ある時期にこれらを集大成する。
- (3) 調査では、臨地してその方言を簡略音声記号で収集し、できるだけ分析しない生の言語資料を得るようにする。
- (4) 調査は、外間守善・屋比久浩・中本正智・内間直仁・野原三義・加治工真市の所員・研究員が適宜担当する。
- (5) 一年ごとの調査結果をまとめる。

昭和50年の調査対象地点は、奄美方言の中では山間部にあたる宇検村湯湾とした。

宇検村には、宇検・久志・生勝・芦検・田検湯湾・石良・須古・部連・名柄・佐念・平田・阿室・屋鈍の集落がある。その中では湯湾が中心地であり、世帯数は約300、人口は約1,000で宇検村全体の約4分の1の割合をしめている。主な産業は大島紬の生産であるが、林業も行なわれている。

緑の山影を落とした焼内湾の自然美は最高のものである。とくに東支那海の彼方に沈む赤い夕日は神秘的な雰囲気を読ませている。

焼内湾の深さは、深いところで60尋もあって大型船舶の出入りに好都合である。そのため、夏の台風時には船舶の避難場所にもなっている。

奄美大島の言語調査を実施するにあたっては田畑英勝先生にたいへんお世話をいただいた。そして、現地の宇検村の教育長、長田重徳先生には湯湾の方々をご紹介くださったりして、お世話をいただいた。名瀬市浦上の調査にあたっては、有田清与先生に全面的にお世話いただいた。そして、浦上では宿泊のお世話をくださった赤崎信男氏・ツギ様にも多大のご協力をいただいた。また、区長の寿長蔵氏には、調査場所をかせてくださったり、話者への連絡の便宜をはかってくださったりして、これまたたいへんお世話になった。古仁屋では四本武俊氏に全面的にご協力をいただいた。その他、多くの方々の身にあまりご協力をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

奄美大島の方言調査は、昭和50年7月26日から、同8月15日にかけて行なった。

調査にあたって、話者は次の方々である。

吉田菊太郎氏 (78歳)
大友 英良氏 (77歳)
生田 永哲氏 (75歳)
溝辺 サチ氏 (71歳)
主島 茂八氏 (53歳)

浦上

前山 福寿氏 (80歳)
崎田 吉彦氏 (79歳)
前山 前国氏 (78歳)
栄 百義氏 (77歳)
中田 豊二氏 (77歳)
赤塚 寿一氏 (75歳)
井口 米彦氏 (74歳)
福永 福納氏 (73歳)
福永運千代氏 (71歳)
悦田 勝治氏 (70歳)
松井 友七氏 (65歳)

古仁屋 四本武俊氏 (81歳)

以上の方々には、われわれ方言調査員の先生となって、お忙しいにもかかわらず、暑さの中で汗をふきふき、連日のように方言の発音を教えてください、方言の意味を教えてください、ここに心から厚く御礼を申し上げます。

今回のまとめは、次のような分担で行なった。

「自然談話」は内間直仁、「語彙」は中本正智、「文法」のうち、動詞・形容詞・助動詞などは内間直仁、助詞は野原三義。

まとめにあたっては、奄美大島湯湾の方言を主とし、名瀬市浦上方言や瀬戸内町古仁屋方言を参照して、適宜加えることにした。

法政大学沖縄文化研究所 言語班

代表 外間守善

湯湾 溝辺 クニ氏 (85歳)